

研究推進校事業報告書

<取組と成果のポイント>

2名の道徳教育推進教師が中心となり、授業作成シートと八輪小道徳スタンダードに基づく授業づくり、外部講師招聘による効果的な指導法や評価の工夫の研修を行うなど全校体制で「特別の教科 道徳」を要とした道徳教育の充実を図った。その結果、自分の思いを表現し、友達の考えから学び合うことができる児童や、道徳的課題を自分事としてとらえられる児童が増えてきた。

また、地域や学校の特色を生かし、教育活動全般にわたって、道徳教育の視点を意識づけることにより、成長を実感し、実践意欲につなげる姿が見られた。

1 研究推進校の概要

学校名	所在地	電話番号	児童数	備考
愛西市立八輪小学校	愛西市立石町宮西 39 番地	0567 (37) 0353	94 人	

本校は、愛知県西部にある愛西市のさらに西端、八開地区に位置する。八開地区は全国でも蓮根の産地として有名で、学校周辺も蓮田に囲まれている。全学年単学級・特別支援学級2学級を含め計8学級の小規模校である。豊かな自然に囲まれ、学校の教育活動に協力的な地域・保護者に恵まれている。

2 研究課題

(1) 道徳の授業の抜本的改善

- ① 授業作成シートと八輪小道徳スタンダードに基づく授業づくり
- ② 外部講師招聘による効果的な指導法や評価の工夫の研修

(2) 地域の特色を生かした道徳教育の取組

- ① 各教科・学校行事・総合的な学習の時間・特別活動に道徳教育の視点を関連付けたカリキュラムマネジメント
- ② 家庭・地域への発信と連携

3 研究主題とその設定の理由

「特別の教科 道徳」を要とした道徳教育の充実
—道徳科の指導と評価の一体化—

令和4年度愛知県道徳教育推進校の委嘱を受け、研究主題を「『特別の教科 道徳』を要とした道徳教育の充実—道徳科の指導と評価の一体化—」とし、「考え、議論する」道徳科の授業づくりの研究を進めるとともに、道徳教育の視点を教育活動全般に意識づけ道徳教育の充実を図った。

本校は全学年単学級であるため、児童同士がお互いのことを理解し合い、良好な人間関係を築いている。一方で、幼少期からの固定化された人間関係や人と関わる経験の少なさから自分に自信がなく、自分の思いを言葉にすることに苦手意識があると考えられる。また、少人数の中で学校生活を送っているため、多様な意見に触れ合う機会があまりなく、誰かと競ったり切磋琢磨したりする機会も少ない。そのため、話し合い活動の場では、友達の発言に反応しながら児童同士で話し合いを進めていくことが難しく、活発な議論までつながっていかない。

このような現状をふまえ、道徳科の目標である「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的に・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」ことを十分に達成するために、外部講師から効果的な指導法や評価の工夫を学び道徳の授業の質を向上させること、学校行事や児童会活動を道徳教育の視点から、年間指導計画を整理すること等に全校体制で取り組んでいく必要があると考えた。さらに、授業研究と研修をPDCAサイクルで検証しながら計画的に積み重ねていくことで、評価が児童にとっても教師にとっても次の指導に生かされるものとなり、指導と評価の一体化につながると考えた。

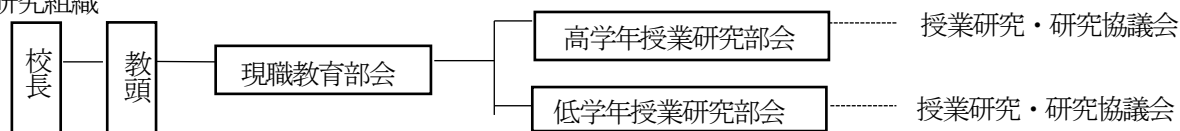
そこで、「道徳の授業の抜本的改善」と「地域の特色を生かした道徳教育の取組」を研究の柱として、「自分の思いを表現することができる」「友達の考えから学び合うことができる」児童の育成をめざし、「特別の教科 道徳」を要とした道徳教育の充実を図ることとした。

4 研究の概要及び特色

(1) 研究仮説

- ・ 道徳の授業において、教材や内容項目の分析を丁寧に行い、発問と場の設定の工夫や効果的なノート（ワークシート）の活用をすれば、一人一人が道徳的課題を自分事としてとらえ、対話を通して深い学びを得られることができ、道徳性の高まりと成長実感がもてるだろう。
- ・ 地域や学校の特色を生かし、教育活動全般にわたって、道徳教育の視点を地域全体に意識づけることにより、成長を実感し、実践意欲につなげることができるだろう。

(2) 研究組織



今年度は、道徳教育推進教師を2名（教務主任、担任1名）配置した。2名の道徳教育推進教師を中心に、全教職員が主体的な参画意識をもち、道徳科の指導力の向上を目指して研究を推進した。

(3) 研究の手立て

【道徳の授業の抜本的改善】

- ① 自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考えることができる授業づくりをする。
 - ・ 「授業作成シート」を使い、教材の分析を丁寧にし、その構造やそこに含まれる道徳的価値、内容項目について深く理解した上で、授業のねらいに深く関わる中心発問を考える。
 - ・ 児童の考えや発言を予想し、自己を見つめさらに多様で深い考えを引き出すことができるよう、心を揺さぶる補助発問や問い返しを準備する。
- ② 対話の中から気付きが生まれ、道徳性が高まるよう場の設定をする。
 - ・ 道徳的価値について考えを深化させ、道徳性を高めるために、対話（自分・教材・友達）の時間を十分保障する。
 - ・ 自分の考えを伝えやすい雰囲気作りには心がけ、教師が意識的に児童の考えを「聞く」「返す」「ゆさぶる」「拾う」とともに、発達段階に応じて対話の仕方の工夫をする。
- ③ 自らの考えを深め、整理するためにノート（ワークシート）を効果的に活用する。
 - ・ 中心発問に対する自分の考えを記録し、対話の中で変わったり、深まったりした考えを追記することで、道徳的価値観の変化や深まりに気付かせる。
 - ・ 授業の終わりに、自分の考えと友達の考え、過去の自分と現在の自分の意識等自分の変化・成長を振り返ることで、道徳性の高まりと成長を実感させる。
 - ・ 授業後も気付きや学びを自由に記録することで、学びを深め、継続する役割をもたせる。また、長期休業前には、これまでの道徳の学習を振り返り、長期休業後の学習意欲につなげる。
- ④ 考え、議論する道徳の授業が、どの学年でも行えるよう「八輪小 道徳スタンダード」を作成し、活用する。
 - ・ 道徳教育推進教師を中心に、「八輪小 道徳スタンダード」を作成し、どの学級も道徳スタンダードに沿って授業を行う。また、定期的に見直しを行い、より良いものに改善する。
- ⑤ 外部講師を招聘し、授業力の向上を図る。
 - ・ 道徳授業に精通した外部講師を年5回招聘し、研究の方向性や内容について助言をいただくとともに、よりよい授業づくりや評価方法等について継続的に学ぶ。また、模範授業を観察したり、道徳の授業を見ていただき個別に指導を仰いだりすることで、全教職員の授業力向上を図る。

【地域の特色を生かした道徳教育の取組】

- ① 地域や学校の特色を生かしたカリキュラムマネジメントを行う。
 - ・ 地域や学校の特色を生かし、道徳的視点を意識づけながら、各教科・学校行事・総合的な学習の時間、特別活動を関連付けてカリキュラムマネジメントを行う。
 - ・ 実践後のふりかえり、まとめの作文やお礼の手紙等から、児童の道徳性の高まりや変容について検証する。

② 家庭・地域と共通理解を深め、連携を図る。

- ・ 「親子道徳」「道徳一斉授業公開」「親子ふれあい観劇」等を設定し、保護者に参加・協力を得る。
- ・ 学校通信及び学校ホームページで、本事業に係る学習や活動の様子を定期的に発信する。

(4) 研究経過

実施月	実施内容	主な行事等
4～5月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究内容、研究目的の周知と共通理解 ・ 道徳年間計画の作成 ・ 研究計画と研究組織の策定 	入学式 始業式 1年生を迎える会 修学旅行（6年）
6月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 意識調査の実施（県教育委員会作成） ・ 6.4「親子道徳」の実施（授業公開日） 	体力テスト 授業公開
7月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 校内研修（外部講師招聘）中村浩二氏 授業観察 指導・助言 講演「『考え、議論する』道徳科の授業づくり」 7.7 3限研究についての指導・助言 4限授業観察＜6年＞ 5限授業についての指導・助言 15:15～講演 ・ ふりかえりの実施（校内作成） ・ 取組に対する評価・分析と考察 	野外活動（5年） 学校保健委員会
8月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 校内研修（外部講師招聘）中村浩二氏 ワークショップ「『中心発問を核とした』道徳科の授業づくり①」 8.1 13:45～ワークショップ 	
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 校内研修（外部講師招聘）中村浩二氏 模範授業 授業観察 指導・助言 ワークショップ「『中心発問を核とした』道徳科の授業づくり②」 9.5 3限模範授業 4限授業観察＜1年＞ 14:15～指導・助言 15:15～講演 ・ 校内研修（外部講師招聘）中村浩二氏 授業観察 指導・助言 講演「道徳科における指導と評価の一体化」 9.20 3限授業観察＜3年＞ 4限授業観察＜5年＞ 5限指導・助言 15:15～講演 	就学時健診 福祉実践教室
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 校内研修（外部講師招聘）中村浩二氏 授業観察 指導・助言 講演「道徳科の授業こそ『個別最適な学び』であり『協働的な学び』であるということ」 10.14 3限授業観察＜2年＞ 4限授業観察＜4年＞ 5限指導・助言 15:15～講演 	前期終了 後期開始 ふれあい観劇会 運動会 社会見学
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 11.8 愛知県道徳教育推進会議委員による研究推進校の視察 5限公開授業＜6年＞ 14:55～意見交換 ・ 11.10「道徳一斉授業公開」の実施（授業公開日） 	社会見学 授業公開 学校保健委員会
12月	<ul style="list-style-type: none"> ・ ふりかえりの実施（校内作成） ・ 取組に対する評価・分析と考察 	持久走大会 作品展
1～3月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 意識調査の実施（県教育委員会作成） ・ 取組に対する評価・分析と考察 ・ 本年度の反省と次年度に向けて検討 	授業公開 つくしご飯の会 6年生を送る会 卒業式 修了式

(5) 研究課題にかかわる取組

【道徳の授業の抜本的改善】

① 授業作成シートと八輪小道徳スタンダードに基づく授業づくり

道徳の授業では、内容項目やねらいに迫ることができるよう、毎時間「授業作成シート」を作成し、中心発問を考え、より深く考えさせるための補助発問を設定して授業を組み立てている。

研究授業前には、授業者が事前に作成した「授業作成シート」をもとに指導案を作成し、各部会で指導案を検討する。授業後には、各部会で振り返りの時間を設け、授業の改善点を共有している。教職経験年数がさまざまな職員集団ではあるが、経験年数に関わらず、互いに授業を参観し合うことは、互いの良い刺激になり、自分の授業を見つめ直すきっかけ、授業力向上の機会となっている。

八輪小道徳スタンダードでは、道徳の授業が、「八輪っ子にとって楽しい時間であり、八輪っ子が待ちわびる授業」「八輪っ子が、自分事として考え、友達と考えを交流しながら、道徳性の高まりと成長実感をもつことができる授業」になるよう、「場の設定」「授業づくり」「ノート活用」の3つの観点から授業を行っている。

② 授業実践

授業研究と研修をPDC Aサイクルで検証しながら計画的に積み重ねていくことが、児童にとっても教師にとっても評価が次の指導に生かされることとなり、指導と評価の一体化につながると考え、道徳教育推進教師が中心となり研究を進めた。

<6年生の実践>

ア 学級の実態

道徳教育推進教師が担任する6年は、男子6人、女子5人で構成されている。落ち着いた雰囲気の中で学習に取り組むことができ、ほとんどの児童が自分の考えをノートに書くことができる。また、入学当初から同じメンバーで過ごしているため、学級の結束力は強く、何事にも協力して取り組むことができる。しかし、自分の意思や考えを強くもっていても、自分の思いを積極的に表現することは少ない。学級で話し合っ物事を進めていく際に、多数派と少数派に分かれると、少数派は自分の意見を強く主張することなく、自然と多数派に染まるような場面が少なからず見られる。また、7月に行った振り返り（校内作成）で、「道徳の授業に意欲的に取り組むことができたか」という問いについて、3人の児童が「あまり思わない」と答えている。

イ 授業実践

八輪小道徳スタンダードに基づく授業を行うとともに、学級の実態を踏まえさまざまな形態の道徳の授業を計画し、授業改善に努めた。

6月4日〔親子道徳〕

親子道徳では、保護者に本校の道徳の取組を知ってもらうとともに、親子で同じ教材を学習することを通して、児童にとって納得や発見のある深い学びを得られることを目的に授業を行った。

【主題】誠実に明るいい心で（A 正直、誠実）

【教材】「手品師」（「小学道徳 6」教育出版）

夢に近づくチャンスより、男の子との約束を選んだ手品師の姿から誠実に生きることについて、考えを深めた。「手品師は、誠実だと思いますか」という中心発問について、児童と保護者それぞれが意見を交流し、さらに全体で考えを深めた。

<A児のノートより>

6月4日 中心発問に対する自分の考え

- ・ 手品師は誠実。自分のことよりも男の子のことを優先して、約束を守ったから。

6月6日 追記

- ・ お父さんの「ショーではなく男の子のところに行ったことは、男の子に対しては誠実だけれど、今までパンを買うこともやっとなほどお金がなかった生活をしながらも手品師をやっていた自分に対して誠実ではない」という考えを聞き、「男の子には誠実だけれど、ショーに誘ってくれた友達や自分に誠実でない」という考えに変わった。

6年生は11人という少人数の学級であるため、話し合いを通して多様な考え方を知ることに限界がある。今回は、クラスメートだけでなく、父や母の考えと自分の考えを比べることで、さまざまなものの見方や考え方があることを知るよい機会となった。また、後日、設定した親子道徳を振り返る時

間は、ノートに気付きや学びを自由に追記することで、学びを深め、意欲を継続することにつながった。

7月7日〔研究授業〕

授業アドバイザー中村浩二先生に授業観察していただき、4月からの取組や今後の方向性について、ご指導いただいた。

【主題】広い心をもって（B 相互理解、寛容）

【教材】「ブランコ乗りとピエロ」（「小学道徳 6」教育出版）

本教材の内容項目は「相互理解、寛容」であるので、本時の中心発問は、ピエロの気持ちが変化したところに注目させ、「ピエロの心から、サムを憎む気持ちが消えてしまったのは、どうしてでしょう」と設定した。机間指導の際に児童の意見把握に努めたことが、意図的な指名に生かされ、話し合いに役立てることができた。児童は「顔が真っ青になるまでサムはがんばった」や「サムもピエロも目立ちたかった」と発言し、サムのがんばりやピエロとサムの共通点に気付くことができた。振り返りの時間には、自分の意見と友達の意見を比較したり、本時の教材を通して過去の自分とこれからの自分について考えたりしたことを書く姿が見られた。



【「ブランコ乗りとピエロ」話し合い】

＜A児のノートより＞

7月7日 ふりかえり

- ・ 自分と似たような「疲れ果てて、顔も真っ青なサムが・・・」という意見もいくつかあったが、「観客を楽しませるため」という意見や「サムもピエロも目立ちたかったから」というような全然ちがう意見もあり、どちらかという自分とちがう意見に深く納得した。

課題として、ノートを書く時間がやや長く、ペアによる意見交流の場では自分の意見を発表するだけに終わってしまい、交流を通して全体的話し合いで自分の考えを深めることは難しかったことが挙げられる。中村先生から、「しっかりと考えることができる子やその考えたことを発言できる子が多く、学ぶための良い雰囲気が出来上がりつつある。今後の改善策としては、ノートに自分の考えを書く時間を短くするとよい。また、担任は子どもと一緒に立ち止まり、『それってどういうこと？』と深く考える時間が必要である」という助言をいただいた。

10月12日〔5・6年合同道徳〕

5年生にとっては6年生の深い考えを知ること、6年生にとっては、5年生の活発な意見交換から刺激を受けること、5年生で同教材を学習した時と今回の考えを見比べることで自分自身を振り返ることを目的に授業を行った。

また、中村先生からご指摘があった「ノートに自分の考えを書く時間を短くすること」「担任が、意識的につぶやきを拾ったり、問い返しをしたりすることで、じっくりと考える時間をつくること」を意識しながら、授業改善を図った。

【主題】法やきまりを守って（C 規則の尊重）

【教材】「図書館はだれのもの」（「小学道徳 5」教育出版）

内容項目が「規則の尊重」であり、本教材は、「規則を守るという順法精神」と「公共のものや場の使い方のような社会生活上守るべき道徳という公德心」の2つが関わっている。自分中心に物事を考え、きまりを無視したり、自分勝手な行動したりする友達に対し、毅然としない主人公の気持ちについて、多面的、多角的に考えさせることが必要だと考え、中心発問を「すっきりしないわたしは、どんなことを考えているでしょう」と設定した。

5年生からは、「大学生の言っていることは分かるけれど、言い方がきつからすっきりしないと思う」という意見が出て、その考えに賛同が集まりかけたが、それに対して6年生から「誰にでも凶



【5・6年生混合グループでの話し合い】

書館を使う権利はあるけれど、公共の場の使い方は、マナーを守ったうえでということ」という内容項目に迫った意見が出て、授業の流れが変わった。特に6年A児の意見に対しては、5年生から感嘆の声が挙がり、学びを広げることができた。

<A児のノートより>

10月12日 中心発問に対する自分の考え

- ・ 確かに図書館を使う権利はみんなにあるけれど、それは図書館内で自由なことをしていいことではないし、決まりを守るという条件で使うことが許可されていると思うから、大きな声を出していた自分たちが悪いのではないかなと思っていた。

10月12日 授業後追記

- ・ 5年生は常にたくさんの人が手を挙げていたり、1つのつぶやきから話し合いへ発展していたりして、とてもにぎやかな授業だった。自分は思ったことがあっても、それをどうしたらもっとまとまった意見になるかや、本当にそれが質問にあっているかなどを考えるので、発言が減ってしまっていたから、5年生を見習いたい。
- ・ 前（1年前）よりも自分の意見がしっかりしていて、少しは成長しているかなと思った。道徳は苦手教科なので、少しずついいから挙手の回数を増やしていきたい。

6年生が、「図書館はだれのもの」を学習するのは2度目である。多くの児童が、1年前の自分との比較をし、考え方の変化や道徳性の高まりを実感することができた。また、はじめはほとんど挙手がなかった6年生が5年生の活発な意見交換を目の当たりにして、徐々に手を挙げ始め、授業を活性化させた。6年生にとっても5年生にとっても良い刺激を受けた1時間となった。

また、以前はノートに記述したことをそのまま読んで発表する児童が多かったが、ノートを書く時間を短くしたことで、自分の考えを簡潔にまとめられるようになり、友達の方を見ながら自分の考えを話す姿が見られるようになってきた。さらに、担任が意識的につぶやきを拾ったり、問い返しをしたりすることで、みんなで考えたい意見を見取り、焦点化することで、少しずつ深い学びができるようになってきた。しかし、A児の授業後追記からも分かるように、まだ学級全体に硬さが見られ、自分の思いを積極的に表現できる児童は限られている。みんなが心を開いて本気で語り合えるように、担任はさらに授業のコーディネート力を伸ばす必要があると考える。

11月8日 [県道徳教育推進会議委員による研究推進校視察]

愛知県道徳教育推進会議委員による研究推進校の視察では、委員の方に授業観察していただき、4月からの取組や今後の方向性についてご指導いただいた。

【主題】いじめをなくすには（C 公正、公平、社会正義）

【教材】「ひきょうだよ」（「小学道徳 6」教育出版）

本教材は、いじめを傍観することのひきょうさに気づき、差別したり偏見をもったりせず人間関係を築こうとする判断力を育てることがねらいである。ねらいに迫るため、中心発問は「ぼくはたかひろの『ひきょうだよ』という言葉聞いて、どんなことを考えていたでしょう」とした。

改善の方策と結果として、5年生との合同授業の効果もあり、授業の中でつぶやく姿が見られるようになった。また、車座で話し合うことにより、自分の言葉で話しやすい雰囲気になった。

しかし、「本当は助けてほしかった。でも助けてくれなかった。最後の日まで、昔からの友達なのに」という意見が最初に出てしまい、見ているだけはいじめていると同じというねらいに焦点化するという点が弱かった。また、教材を通して、自分の生き方と向き合い、自分のもっている道徳的価値観を新たな視点や考え方で見つめ直すため、「自分ならどうするか」という問い返しをすることが有効ではないかのご指摘があった。

新たな課題と改善策として、ねらいに迫るための意見の取り上げ方の工夫が必要だと考えられる。そのために、担任一人一人が授業をコーディネートする力、特に、子どもの発言やつぶやきを受けて、「返す」「もどす」「ゆさぶる」「拾う」技能の向上に努める。

ウ 6年生の実践の検証



【「ひきょうだよ」車座になり意見交換】

授業実践の検証をするため、長期休業前に道徳の授業に関するふりかえり（校内作成）を実施し、取組に対する評価と分析を行った。

冬休み前に行ったふりかえりで、A児は、一番心に残った道徳の授業に県道徳教育推進会議委員による研究推進校視察の公開授業「ひきょうだよ」を挙げた。

＜A児の「9月から12月までの道徳の授業のふりかえり」より＞

- ・ 話の最後に、「ひきょうだよ」と言われたことはかなり予想外だった。どうしてそんなことを言ったのか、きっと本心ではないとは思っていたけれど、じゃあ本当に思っていたことは何だろうと考えていたときに、チャイムが鳴ってしまって、最終的な結論が出そうで出なかった。いつもはあまり思わないのに、「ひきょうだよ」ではこの先を考えてみたいと思った。

A児の振り返りから、「ひきょうだよ」の学習で、教材や自分と深く対話し、自らの考えを深めた様子が読み取れる。特に「いつもはあまり思わないのに、この先を考えてみたいと思った」という記述から、自分自身の変化・成長を実感したと考えられる。

また、学級全体の変化として、「道徳の授業に意欲的に取り組むことができたか」という問いに対し「あまり思わない」と答えた児童が7月には3名いたが、12月には1名に減った。

このように、半年間、試行錯誤しながら道徳の授業の抜本的改善に取り組むことで、自分の思いを表現し、友達の考えから学び合うことができる児童や、道徳的課題を自分事としてとらえられる児童が増え、授業後も考え続ける姿勢が少しずつ見られるようになってきたと考える。

＜3年生の実践＞

【主題】真心をもって（B 礼儀）

【教材】「三本のかさ」（「小学道徳 3」教育出版）

本教材では、かさの貸し借りのやりとりを通して、礼儀の大切さや真心をこめたふるまいのよさを学ぶ。導入として、教師が傘を返す場面を演じ、児童に「自分が傘を借りたら、どうやって返すか」を問い、その情景を自分事としてとらえられるよう工夫した。

また、内容項目の「礼儀の大切さを知り、誰に対しても真心をもって接すること」に迫るため、本時の中心発問は、「三人は、どんな思いでかさを返したのでしょうか」とした。中心発問について考える場面では、はじめに自分の考えをまとめ、次に隣同士、最後は全体で活発な意見交換ができた。児童から、「なお子さんは、きょう子さんが困らないように、すぐに返した。また、お礼の気持ちを込めてプレゼントをもっていった」や、「りょうへいさんは、きょう子さんが、気持ちいいだろうと、きちんと乾かしてたたんで返した」「つとむさんは、きょう子さんに借りた時より、よい状態で返したいから、ひものほつれをおばあさんに直してもらってから返した」など、それぞれ登場人物の思いに気付くことができた。また、「三人に共通する思いは何だろう？」の問いに対し、児童から「返し方は違っても心を込めてお礼をしたいという気持ち」「ひとそれぞれのやさしい気持ち」「真心」という内容項目に迫る発言が聞かれ、道徳的価値について考えを深化させることができた。



【「三本のかさ」隣同士で意見交換】

本授業の課題として、「みんなちがう返し方でよいのか」という児童の発言を取り上げ、話合いを進めていけば、さらに真心の表れ方の違いに焦点化され、深い話合いができたと考える。「主体的・対話的で、深い学び」の授業を

実現するために、児童の発言やつぶやきをよく聞き、拾い、学びの質を上げる授業力を付けていく必要があると考える。

＜1年生の実践＞

【主題】わがままをしないで（A 節度、節制）

【教材】「かぼちゃのつる」（「小学道徳 1」教育出版）

本教材では、わがままや自分勝手な行動をすることは、周りの人に迷惑をかけること、時には自分にも被害が及ぶことに気付かせたい。そこで、挿絵を使い登場人物や話の内容を確認した後、かぼちゃが走ってきた車につるをひかれ、つるが切れてしまった場面を取り上げ、中心発問を「ぼろぼろ、

ぼろぼろ涙を流しているとき、かぼちゃは心の中で、どんなことを思ったでしょう」とした。

児童は「みんなの言う通りにすればよかった」「畑でいっぱい伸ばせばよかった」と発言し、周りのことも考えられる意見が出た。教師が児童に問い返したり、さらに詳しく聞いたりするなど児童の意見に対して、揺さぶりをかけることで、教師と児童で話し合いを深めていくことができつつあった。

考えを交流する場面では、ペアで意見交換した後、教室を自由に動き他の友達とも考えを伝え合い、自分とは違う考えやなるほどと思ったことをたくさん見つける場を設定した。



【「かぼちゃのつる」板書の工夫】

振り返りでは、もしみんながかぼちゃさんと友達だったら、どんなことを教えてあげるかについて、かぼちゃさんへの手紙にして書かせた。1年生では、今日の授業で学んだことについて書くことが難しかったので、振り返りでは、実生活に戻って考えさせるなど、課題を決めて書かせたり、手紙にして書かせたりするなど工夫をした。

今後の課題は、自分の考えが書けない児童への支援である。書けない児童には、ペアや他の友達との友達の意見交流で、「なるほど」と思った意見をワークシートに書くことを助言している。

道徳の学習を始めたばかりの1年生であるが、少しずつ「八輪小道徳スタンダード」に沿って授業を行い、「考え、議論する道徳」の授業ができる基礎をつくっていく。

③ 外部講師招聘による効果的な指導法や評価の工夫の研修

道徳授業に精通した外部講師として授業アドバイザーの中村浩二氏を年に5回招聘し、全職員に向け研修会を行い、よりよい授業づくりや評価方法等について継続して学んだ。また、担任全員を対象に授業研究を行い、個別に指導をしていただいた。さらに、6年生では模範授業もしていただき、児童が深く考えるようにするためには、児童の思いと教材とのズレを導入に使うことや、児童と一緒に立ち止まって、「それって、どういうこと？」と深く考える時間をとることが大切だということを教えていただいた。

全職員対象の研修会では、以下のテーマについて研修して学びを深めた。

ア <講話> 「考え、議論する」道徳科の授業づくり

1時間の道徳科の授業で目指すものは、「道徳的な問題を深く考えること」であり、道徳的価値にかかわる問題に関して、いかに深く考えさせることができるかということ意識して、授業を進めなければいけない。議論するために大切なのは、深く考えさせる「発問」と「学びの風土（雰囲気や人間関係）」であることを学んだ。

イ <ワークショップ> 「中心発問を核とした」道徳科の授業づくり

実際に行われた授業の問題点「なぜ全体の話し合い活動が活発にならなかったのか」で中心発問の重要性を学び、課題1～5について話し合い、授業を組み立てるワークショップを行った。

〈課題1〉この教材にある「考えるべき道徳的な問題」は何か。

〈課題2〉中心発問としての文章を作る。

〈課題3〉中心発問でさらに深く考えさせるための「二の矢（補助発問）」を考える。

〈課題4〉中心発問よりも前の場面で押さえておかなければならない所を考える。

〈課題5〉授業の導入（方向付け）を考える。



【中心発問を考えるワークショップ】

ウ <講話> 道徳科における指導と評価の一体化

評価で大切なことは「評価を指導にいかす」「指導したことで評価する」ことであり、道徳科における評価の第一のねらいは「授業改善にいかす」ことであると学んだ。道徳科における指導と評価の一体化とは、「指導したことで評価し、その評価を次の授業で生かすこと」であるから、授業者は、深く考えさせることができたかを評価し次の授業に生かしていく。また、児童は、深く考えることにより、成長実感がもてるようにしていく。これが指導と評価の一体化につながると学んだ。

【地域の特徴を生かした道徳教育の取組】

① 各教科・学校行事・総合的な学習の時間・特別活動に道徳教育の視点を関連付けたカリキュラムマ

ネジメント

ア 児童会によるあいさつ運動

本校では、毎朝、職員室を通るとき、大きな声で挨拶をする児童が多い。しかし、対教師、友達同士になると、自分から進んで挨拶をすることができない現状にある。そこで、「進んで挨拶ができる元気で明るい学校にしていきたい」という思いから、児童会が中心となり、あいさつ運動を行った。

あいさつ運動に取り組んだ日は、休み時間に振り返りを行った。振り返りでは、あいさつ運動を行ってよかったところや改善していきたいところだけではなく、あいさつ運動をしてどう思ったのかについても振り返った。挨拶を返してもらうにはどうするとよいのかを考えさせると、自分から大きな声で、目を見て挨拶をするとよいということが気が付いた。回数を重ねていくと、児童の方から進んで挨拶をする姿も見られるようになってきた。

あいさつ運動後の振り返りでは、「前より元気よく挨拶をする人が増えて、うれしくなった」「相手も元気よく挨拶をしてくれると、自分も元気よく言おうと思った」などの声が挙がった。

あいさつ運動は、挨拶のよさを感じ、学校全体で挨拶をしようという心情を高めることができた。

イ FBC（フラワーブラボーコンクール）活動

本校では、毎年全校児童でFBC活動に取り組んでいる。FBC活動は、何十年も続いている活動で、「自然のすばらしさを感じ取り、自然を大切にする（自然愛護）、委員会活動やこの活動を通して、働くことの大切さを知る（勤労・公共の精神）、みんなで協力し合って楽しい学校をつくる（よりよい学校生活・集団生活の充実）」ことをねらいとして、今年度も、メイン花壇のデザインを全校から募集し、花壇づくりに取り組んだ。



【児童会によるあいさつ運動】



【種まき】



【ポットへ植え替え】



【花壇に植え替えて完成！】

② 家庭・地域への発信と連携

ア ホームページと学校通信「八輪小だより」による発信

学校での教育活動のさまざまな場面で、道徳科の内容項目と関連づけた活動を行っている。その活動の様子を、保護者や地域の方に知らせる手立てとして、毎日ホームページを更新し、毎週月曜日に「八輪小だより」を発行し、家庭・地域に発信している。特に今年度は、道徳教育に重点を置いて取り上げている。

「八輪小だより」では、道徳の授業の特集を組み、道徳の研究推進について保護者や地域の方にも知ってもらい、各学年の道徳の授業研究での子どもたちの様子も発信して理解と協力を求めている。

また、今年度よりホームページに「道徳教育」の見出しを増やして、学校全体で取り組んでいる授業力向上の研修の様子や授業研究の様子をタイムリーに発信している。

イ 授業公開での「親子道徳」と「一斉道徳」

6月4日（土）の学校公開日では、全学級で親子道徳を設定した。保護者にも道徳の授業に参加していただき、発達段階に応じて、道徳的価値について児童とともに考える、あるいは道徳的な心情を育むことをねらいとした活動を行った。

また、11月10日（木）の学校公開日では、全学級で教科書教材を使って道徳の授業を行った。どの学級でも友達の考えを聞きながら、自分の考えを深める姿が見られ、本校が今年度行ってきた研究の成果を保護者に知っていただくよい機会となった。

5 研究の評価

3年生B児が、作文の中で、「前期にがんばったことは、わすれ物をしないように気をつけたことです。なぜかという、『あなたならできる』というお話をどうとくの時間に勉強したからです。『あなたならできる』は、わすれ物ゼロ作せんのお話だったので、その後、朝、連絡帳を見て、わすれ物がないかたしかめるようになりました」と記していた。「あなたならできる」では、自分の生活を見直して忘れ物をしなくなった児童を題材にしており、B児は、道徳の学習を通して、自分でできることは自分でやることに意欲をもつことができた。このように、本校児童は、少しずつ道徳的实践意欲や態度を高めることができています。

また、全校児童を対象に行った校内作成の道徳のふりかえりでは、「道徳の授業に意欲的に取り組むことができたか」という問いに対し、「とても思う」「そう思う」と肯定的な回答をした児童は、7月には全校で81名（約87%）であったが、12月には85名（約91%）に増加した。

(1) 研究の成果

【道徳の授業の抜本的改善】

- 全担任が道徳の授業の前に、「授業作成シート」を作成し、電子データで保存した。毎時間、丁寧に教材分析を行い、適切な中心発問を選択することで、児童の多様な意見を導き出すことができた。さらに、ねらいに迫る補助発問をいくつか準備して授業に臨んだことで、より道徳的価値について深く考えさせることができた。
- 令和2年度より、全ての学級が、「八輪小道徳スタンダード」に沿って授業を行っているので、全担任が、教材や内容項目の分析を丁寧にを行うこと、発問と場の設定の工夫を行うとともに対話や話し合いの場を充実させること、道徳ノートの活用を図ることを意識することができている。また、進級し担任が交代しても児童に戸惑いが少ないという利点が挙げられる。
- ノート（ワークシート）の活用方法は、昨年度から、「中心発問についての考え」「授業のふりかえり」をパターン化し、児童が、1時間の思考の流れや変化を記録することとした。低学年はワークシートを使用し、高学年はマスや行を気にすることなく自分の考えを書くことができる縦罫ノートを使用している。授業中、「多面的・多角的な見方」「自分自身との関わり」という視点で全員の見取りをすることは難しいので、ノート（ワークシート）に書かせることで児童の考えを把握し、評価に活用している。また、ノートは、4年生の4月から使い切るまで同じものを使用させるので、前学年の記述も1冊のノートで分かり、児童自身も成長・変化を実感することができている。
- 外部講師を招聘し、授業づくりや評価の研修、中心発問づくりのワークショップ等を行い、道徳の授業づくりに生かしていくことができた。特に、外部講師に全学年の道徳科の授業を1時間ずつ観察していただき、個別に指導を仰いだことで、担任一人一人の課題が明らかになり、授業力向上につなげることができた。
- 道徳教育推進教師を2名（教務主任、6年担任）配置し、教務主任は、道徳教育の全体計画や年間指導計画の作成等を中心に研究を進め、6年担任は、PDCAサイクルで検証しながら計画的に授業実践を積み重ね、授業改善を行った。2名配置することで、深い学びの実現や授業力向上を目指し、チームで授業づくりを行うことができた。

【地域の特色を生かした道徳教育の取組】

- 地域や学校の特色を生かし、道徳的視点を意識づけながら、各教科・学校行事・総合的な学習の時間、特別活動を関連付けて行うことで、道徳的な心情、実践意欲を高めることができた。
- 発信と連携により、児童との触れ合いの時間を楽しみながら、道徳の授業について保護者にも知っていただくことができた。また保護者とともに考えることにより、深く考えることができたり、家庭で話題にしたりすることもできた。

(2) 今後の課題と取組

- △ 担任一人一人が授業をコーディネートする力をつけることが、今後の課題と考える。具体的には、児童の発言やつぶやきを受けて、「返す」「もどす」「ゆさぶる」「拾う」技能を向上させたい。担任一人一人が意識をしながら実践を繰り返し行い、内容項目に迫る質の高い授業ができるように努力していきたい。
- △ 高学年は道徳ノートに、授業後も気付きや学びを自由に記録し、学びを継続することにより、成長を実感することに役立てたいが、まだまだ十分ではない。担任が声をかけ、学びの継続を恒常化していきたい。